

優秀賞

安心と幸せな暮らしのために

大阪府 大阪市立北稜中学校 一学年

木岡 彩奈

ある少女の父は、太陽のように明るく元気な人だった。彼女が小学五年生になるまでは。

その春、彼女の父は重い病に侵された。末期のS字結腸ガンだった。だが、事の重大さは彼女には知らされず、淡々と時が過ぎていった。

「病気で大変だなあ。早く治るといいな。」

入退院を繰り返す父だったが、彼女はその程度の軽い気持ちだった。帰宅すると家にいることが多くなった父に対して、彼女は

「何でいつまでも働かないの？いつまで休む気なんだろう。」

と、可哀想と思うどころか酷い態度をとることが増えていった。

父は既に「余命半年」と宣告されていたのだが、せめて娘が小学校を卒業するまでは生きなければ」という気力で病氣と闘った。しかし、病氣は徐々に悪化していった。会社が父の病氣を考慮して転勤を命じた。ゆっくり療養できる環境を作ってくれた会社に感謝の日々であった。だが、この頃にはもうほぼ仕事に行けず、家での生活が続いた。彼女も大変さには気付いていたが、死んでしまうとは思ったこともなかった。いつか治る、そう思っていた。しかし、ガンは容赦なく、他のところにも次々と転移し、発覚から約二年で少女の父親は亡くなったという。

それから二十八年が経った今、少女は私の母となり、十二歳の私に話してくれた。

小さい頃はこんなことが起こるなんて思いもしない。ましてや生命保険なんて普段使わないのだから、何の有り難味も分からないだろう。でも万が一のことがあった時、生命保険は救ってくれる。祖父が生命保険に加入してくれていたことで、当時の母は塾や習い事にも通わせてもらっていたし、欲しい物も買ってもらっていたし、旅行にも行けたという。更には、本人が希望していた県外の私立高校にも通わせてもらい、何不自由のない生活を送れた。母は祖母に聞いた。

「お父さんが亡くなって大変なはずなのに、何で私立の高校に行かせてくれたの？」

その時初めて、生前に祖父母が万が一の時に備えて、十分な生命保険に加入してくれていたことを母は知った。祖父母は、二人とも保険会社に勤めていた事

第55回中学生作文コンクール

もあり、「保険の大切さ」は人一倍知っていた。

「保険って、使わないとまるでお金を捨てているように思える。もちろん使わないで済むことが一番望ましい。でも、私のように家族を支える人に何かがあった時、保険は何ものにも代え難く、有り難いものになる。」

母はそう言った。私は、そのお金を習い事に費やして欲しいと思ってしまう時もある。きつとまだ私には、「本当の有り難味」は分からない。でも母は生命保険に助けられた。そして今があるのだ。私も保険に入ってもらっていることに感謝しなければいけない、初めてそう思えた。

保険に入っているかいかで、人生が大きく変わることも有り得る。長年、多額の保険料を払い続けていても、それを必要とすることなく人生を終える人もいる。それはとても幸せなことだと思う。逆に病気や不慮の事故などによって、突然社会の弱者になってしまうこともある。その弱者を助けることができるのが、生命保険であると思う。

保険は、加入している全ての人々がどんな状況に陥ったとしても、幸せに暮らしていくための「共有の貯金箱」のように思える。たくさんの人を救う素晴らしい貯金箱だ。